

継続した健康活動のプログラム提供と情報提供を行っていく。

(4)施設(地区内施設を包括的に考える)

中学校施設 一〇二

小学校施設 三〇四

青少年広場・会館 一〇二

その他公共運動施設(企業施設も含む) 一〇二

これらの施設を総合して有機的に活用

(5)指導者

体育指導委員をオルガナイザーとし、その下に社会体育指導者として、プログラマーと実技指導を兼ねそなえた指導員をスポーツ村内で発掘養成し、各施設に常駐させ、年間を通しての活動

の実践指導にあたらせる(当初は学校教師、ボランティアである種目別協会指導員の積極的活用を図る)。

〔参考資料B〕五十四年度総理府実施「体力・スポーツに関する世論調査」から

一〇一 自分自身の健康・体力に注意をはらっているか 七三%

一〇二 注意をはらっていない 二七%

一〇三 注意をはらっている者のうち日頃自分の健康や体力の維持増進のために心がけて注意をはらっているもの(複数回答) 四六%

①栄養・食事 四六%

②睡眠・休養を多くとる 四二%

③体操・散歩等の運動 二八%

④規則正しい生活 二〇%

二〇一 この一年間位に、町内会や自治会、PTAなどの催す地域スポーツ行事に参加したことがあるか

全体 十大市

参加した人 二三・四 一〇・六

参加しない人 七六・六 八九・四

二〇二 今後地域のスポーツ行事が催された場合、参加したいと思いませんか

全体 十大市

参加する 四三・二 三五・一

参加しない 四七・七 四九・八

①時間がない 三二・三

②仕事で体を動かしている 三一・九

③何となく 二五・五

④仕事や家事で疲れている 二四・七

〈市民局青少年課育成係長〉

## ②地域に根ざした健康づくり

大正スポーツ村活動

石井 昇

私達の地域大正地区は、昭和五十一年度から五十三年度までの三年間、横浜市教育委員会からスポーツモデル地区の指

定を受けました。最初、教育委員会の体育課から戸塚区役所にスポーツ村構想の話があり、区体育指導委員連絡協議会

で話しあいました。構想を受けることはよいのですが、モデル地区として、スポーツが盛んに行われている地域が望まし

いのか、逆に全く行われていないような地域が望ましいのかを議論しました。その結果、横浜市のモデル地区ということ

- 一 大正スポーツ村の概要と受入れ後の準備
- 二 初年度の取り組み
- 三 二年目以降
- 四 問題点
- 五 さいごに

ならば、地域の組織・陣容にまとまりがあり、スポーツ活動も行われているところが良いだろう、ということになり、大正地区が指定されることとなりました。

大正地区は、昭和初年鎌倉郡大正村時代から、郡對抗駅伝大会、陸上競技大会に優勝し、県大会や神宮大会(現在の国体)へ出場した選手が大勢いる地区です。戦前の人口は三千人くらい。第二次大戦で優秀な友をなくしてしまいましたが、それでも現在、町会の中堅には当時活躍された方々がおられます。また、新しく地域住民となった方々もたくさんいるわけですが、今は、新旧住民の混住化のなかで、

コミュニティとしての活動がうまくいっており、今回のモデルスポーツ村の構想を受けてのスポーツ村作りにも、スムーズに入ることができました。

## 一——大正スポーツ村の概要と受入れ後の準備

モデルスポーツ村構想を受け入れた当時の大正地区はどんなであったか、少し概要をのべますと、

- (一)町内会 二〇町内会
  - (二)世帯数 一七、二七六世帯
  - (三)人口 男 三三二、三一九人  
女 三一、〇六〇人
- 計 六三、三七九人

(四)面積 一一・三九平方キロメートル  
(五)住民の構成(意識程度)

住民の皆さんの生活程度の意識をいえば、中流意識が、つよく、連携は密、一般的にスポーツへの関心が高い、といえます。

### (六)学校

小学校六校、中学校一校(現在は二校)

### (七)その他の諸施設(スポーツ関連)

企業施設三、公共施設三  
(八)指導員数

- 体育指導委員 二七人
- 青少年指導員 二九人
- 学校関係者 一六人
- 子供会 八〇人
- 少年野球 三〇人
- その他 二〇人

受入れの母体として、体育指導委員連絡協議会、青少年指導員連絡協議会、子供会育成指導者連絡協議会が中心となり、連合町内会、PTA、学校関係、交通安全母の会、婦人団体、農協、老人団体等を入れて、大正地区スポーツ活動推進協議会を結成しました。スポーツ村構想の受け入れとともに、まず従来の学校開放の水準を変えてもらいました。つまり、そのときまでは、大正中学が唯一の推進校(年間一五〇日開放)であり、他はすべて一般開放(年間五〇日開放)で

あったものを、すべて推進校としてもらいました。そして、各学校の整備、例えば校庭整備、防球ネットや夜間照明のとりつけ、ゲタバキ校舎でのアコーディオンカーテンの取り付け(夜間、体育館へいくのに教室内を通るため)等を教育委員会の予算で実施してもらいました。区役所から話のあったのが昭和五十年の十一月頃で、翌五十一年の四月から実行活動に入りました。

## 二——初年度の取り組み

スムーズに活動に入ったといいますが、企画部長としては「住民の健康とスポーツ」という趣旨を、地域の方々にどう理解・賛同してもらい、積極的に参加していただいたらよいか、正直なところ、その方法については戸惑いを禁じえませんでした。そもそも、この横浜市のスポーツ村構想と申しますのは、従来のスポーツ活動がとかく競技のためのものや、大会中心の一発行事となっており、住民が一人でも多くスポーツに親しむためには、それではだめである。年間を通して一人でも多くの人にスポーツに親しんでもらうことを目的とし、そのために日々のスポーツ活動に力点を置こう、というものです。スポーツに親しむ、といっても普通の人ならば、健康でありたいと

念じてはいても、だから自分からすすんで主体的に健康づくりに取り組み努力しようとする程の切実感をもっていません。スポーツに親しむ、ということは、言うは易くなかなか実行はできないものです。でも、誰かが先に立って動機づけをしたり、機会が設けられたりすれば、仲間に入ってくることも多いものです。その意味でそうした動機づけや機会作りをする人たちが、すなわち、推進役となる人たちの連携・協力が大切になります。更に、そういう人たちが、企画をたてたい人々にゲームのやり方を指導したりすることができるとも大切となります。今回のスポーツ村構想を実施するため、企画については東海大学社会体育学部の正先生に、ゲームの講習は横浜市レクリエーション協会の人からそれぞれ講習をうけ勉強しました。大正地区では、これらの講習をうけた者たちで協力しあい運営にあたっておられます。

初年度の活動を具体的にのべますと、まず毎月第二日曜日を「住民スポーツの日」として設定し、その日は午前中、大正地区の各小学校を住民に開放します。各学校区では、地区の人たちが協議会をつくっており、何のスポーツをやるのかを独自にきめ指導者をつけて実施しました。住民はどこへいってもよいわけです。卓球、レクリエーションゲーム、ラン

テニス等、内容をかえて実施しました。ピーアールは、行事企画を役員会で決定後、企画部の方でパンフレット等を作成し、スポーツ村役員会から、子供会、町会役員会、PTA、各小学校学区学校開放利用運営協議会等をへて、地域住民へと流すことになっています。初年度の成果をみますと、一回に各学校あたり一五〇〜二〇〇人位の人が参加しています。

### 三——二年目以降

二年目に入り、住民スポーツの日に、スポーツ教室を時々開催することにしました。講師は企画部でつてをたより、直接電話したりしてみつけ出すわけですが、オリンピック出場経験のあるような国際級の人にお願ひしました。そういう実績のある先生方に直接話しをきき、実技を見、指導をうけることは、参加された人々に非常な影響を与え、スポーツをすることへの意識の高揚に大変役立ちました。とくに家庭の主婦にとっては、余暇の活用、健康作りなどの面で、非常に好評をえることができました。

実際に行ったスポーツ教室のいくつかを述べてみたいと思います。

#### (1)健康ジョギング教室

昭和五十三年三月十二日 大正中学

講師は宇佐美彰郎先生(オリンピック三回出場 当時マラソンの世界記録保持者)

この教室はじめてなわけですが、NHK横浜放送局の地域還元事業としての協力をえて、無料で行いました。参加者は子供から老人まで五〇〇人をかぞえ、校庭一ぱいに広がってジョギングの指導を戴き、そのあと、宇佐美先生とともにロードトレーニングも行いました。ランニングとは、日常生活にもとりいれることができ、一人でもできる健康法だということがよくわかりました。

#### (2)なわとび教室

昭和五十四年九月九日 小雀小学校  
講師 鈴木勝己選手(世界なわとびチャンピオン 当時の世界記録連続六時間二十分十秒保持)

この鈴木選手は、選手経験三六年、指導歴延一千回という人で、なわとびの基本、持久のこつ等、場所も余りつかわず、一人でもできる健康法としてのなわとびの良さを指導していただきました。鈴木選手自身、小さい頃は虚弱体質であり、その改善になわとびが役立つわけですが、そういうことを混えての指導は、きく方にもよく理解されたと思われました。

#### (3)卓球教室

昭和五十四年十二月十八日 大正中学校体育館  
講師 伊東茂夫先生(世界選主権出場)

卓球は屋内スポーツで、身近な公民館などにも設備があり、小人数で出来るという魅力があります。更に眼の感覚と敏捷性を要求されるスポーツです。で、体力向上に最適だと思います。伊東先生の模範演技をみせていただいたわけですが、白球のスピード、足腰の強じんさに、皆感動しております。

#### (4)ジョギング教室

昭和五十五年二月二十四日 深谷小学校  
講師 森本葵選手(八〇〇米日本記録保持者) 横溝三郎選手(五千・三千米元日本記録保持者)

参加人員は四〇〇人以上。こもこも一人でもできる健康保持の方法を、丹念に指導していただきました(なお、この企画はヒット・ユニオン社の協力をえて開催したもので、費用はかかっていません)。

このようなスポーツ教室を工夫することより、みんなのスポーツへの関心を高め、さらに教室へ参加した人たちの、スポーツへの参加を日常化しようとして行ったのが、クラブ化です。代表者等、役

割の分担をきめ、自主的運営にしてい

わけです。現在、卓球・成人ソフトボール・家庭婦人バレーボール・老人ゲートボール・少年剣道同好会等のクラブがあり、それぞれ活動しています。

現在の大正地区スポーツ活動推進協議会(大正スポーツ村)の運営の形、及びスポーツクラブの実態を図にしておきます(図一及び表一)。

市からの補助は三年間でなくなり、以後は金銭的にも大正スポーツ村自身の完全な自主運営となっております。

### 四——問題点

現在までの活動をふり返って、少し問題点を考えてみたいと思います。

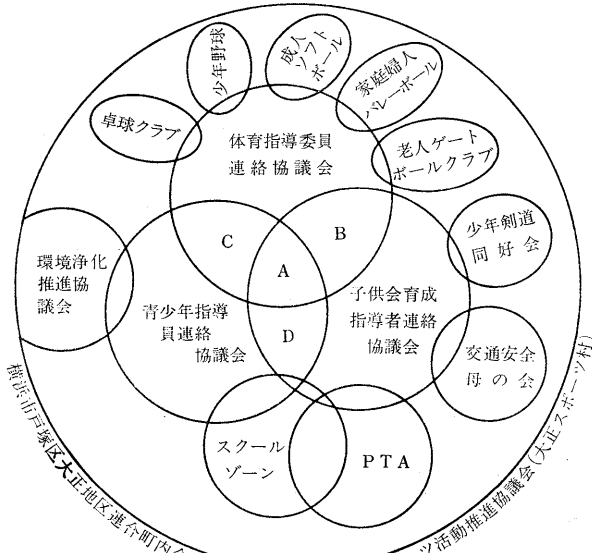
#### (1) PR不足

前にのべたとおり、PR活動は行ってはいるのですが、必ずしも十分でなく、集まりのわるいこともあります。ポスターや口コミの利用等も行っているのですが……。ただ、効果としては、折りこみ(町内会報等)よりは口コミの方が大きいようです。

#### (2)指導者の不足

スポーツを行う上で、指導者は欠かせません。いろいろ工夫して、費用があまりかからぬようにしてはいますが、謝礼程度はだす必要もあります。そうそうは

図一 大正地区スポーツ活動推進協議会及びスポーツクラブ



表一

	連町会レクリエーション大会 子供大運動会 プール開放運営 巡回スポーツ教室(年4回)
Aゾーン	社会を明るくする運動 子供水泳教室 指導者研修会 町別対抗継走大会 子供まつり 体力作りのハイキング・オリエンテーリング
Bゾーン	少年少女スポーツ大会 進学進級記念球技大会 チビっ子オリンピック大会
Cゾーン	野球その他のスポーツクラブ指導 野外活動
Dゾーン	文化祭 手作り教室 オリエンテーリング スクールゾーン対策協議会への協力
その他のゾーン	体指関係 家庭婦人バレーボール・ソフトボール春秋大会 少年野球春秋大会 (地区・区・市大会へ) 壮年一般ソフトボール春秋大会 あさつゆ運動への協力 プール一般開放 区民まつりへの協力 地区内スポーツクラブへの協力
	青指関係 環境浄化推進協議会 愛の一声パトロール(主に非行防止) さわやか運動への協力 ジュニアキャンプ大会 スキー研修会
	子供会関係 映画会 さわやか運動への協力 あさつゆ運動への協力(夏休み早朝ラジオ体そう) 剣道同好会春夏秋冬大会 親と子の交かん会 区民まつりへの参加 書道展 PTA校外補導委員会への協力 交通安全母の会への協力

急激な都市化が進むなかで、私たちの人口も三〇年間に二〇倍という激増を示しました。そのため、今一番必要に迫られているのが、「身近な広場」です。行政にやってもらいたいことは、施設の整備が第一です。以前は、山林や道路も子供たちの恰好の遊び場でしたが、車の増えた今日では、そうはいきません。安心して遊べる「広場」が必要です。また、

これからの社会を考えた場合にも、週休二日制の普及、家事労働の合理化等から生ずる余暇時間の使い方が問題となりましょう。省エネルギー時代であり、余暇活動は、車型から身近なところでの型へと移行しています。その典型として考えられるのがスポーツといえるでしょう。

とすれば、身近でスポーツが行えるように諸施設の設定・拡充が望めます。数字でいえば、人口五〇万人について総合公園が必要とされ、その下に地域人口五万人について、野球・ソフトボールなどのできる多目的グラウンド、テニスコート・プール・体育館が必要です。さらに

青少年のために、町会単位に小グラウンドも必要となります。その他、河川・自然山林についても、散歩道の整備、自転車サイクリングロード・マラソンコース

の性質上、参加が不能という方もおり、大きくは参加意識の壁みたいな限界を感じます。地域住民のスポーツであれば、一人でも多くの方々の参加が望まれるわけですので、企画面でも一層の考慮が問われていると申せます。

優秀な指導者を外からよべるとはかぎりません。とすれば、地域の中で指導者を捜さねばなりません。昔から「能あるタカは爪を隠す」といわれます。身近の地域の中にも優秀な方がたくさんおられると思います。そういう人々をリストアップし、ボランティアとしての活動をお願いしたいと思っています。

(3) 参加者の地域格差指導・企画の面にも問題はありますが、参加者の地域格差の大きいことが大きな問題です。職業

等の設置が考えられましょう。

健康については、自分たちの健康は自分たちで守る、ということが前提となります。生活の中にスポーツをとりこみ継続していくこと、クラブ等を組織して企

画・経費など、運営は地域のみんながそれぞれ負担をし、知恵を出しあっていく、行政には施設、場所の提供をお願いします、こういう形が望ましいと思います。最後に、行政全般への要望をのべたい

と思います。それは、市として統一のとした各局区で連絡調整した行政を、という事です。市民行事を計画しても、市民局と教育委員会で重複している、また道路の掘り返しを、水道・ガス・電気な

どてんでにやっている。こんなムダはなぐす必要があります。ムダを省き、そのうえで市民が本当に欲するところを察し必要な指導性を発揮する、そういう行政をのぞみたいと思います。

〈大正スポーツ村企画部長〉